

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第4回

宗麟に優秀な家臣あり

戦国大名と言えば独裁者といったイメージがありますが、実際の領国支配は重臣たちの合議で決められることが一般的で、命令も多くが重臣たちの連名で伝えられました。

大友氏には、「加判衆」と呼ばれる重臣による組織がありました。大友氏にとって、こうした重臣たちと協力し、豊後国内の「安心・安全」を確実なものにすることが最も重要な責務のひとつであり、約400年続いた領国支配の基本でもありました。

宗麟には、特に「豊州三老」と呼ばれた戸次鑑連・臼杵鑑速・吉弘鑑理という優秀な3人の重臣がおり、北部九州6か国の守護となった宗麟を支えました。

中でも戸次鑑連(後の道雪)は、大友軍きつての猛将として知られています。若いころ雷に打たれ下半身不随になりながらも、戦場では駕籠に乗って出陣し、獅子奮迅の活躍により、軍勢の士気を大いに高めたことが伝えられています。

また、大友氏が日向高城・耳川合戦で島津氏に大敗し、領国支配の弱体化が進む中で、鑑連は1580(天正8)年2月に豊後国大野・直入郡の13人の武将に大友氏領国の危機的状況を訴える檄文を発し、領国支配体制の立て直しに奔走しました。

この3人の重臣が健在であった間に、宗麟の全盛期が築かれたと言っても過言ではありません。



【立花道雪画像】

(柳川市・福厳寺蔵)

宗麟は、大友氏に背いた筑前国の立花城主、立花鑑蔵を滅ぼした後、戸次鑑連に立花氏を継がせました。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639